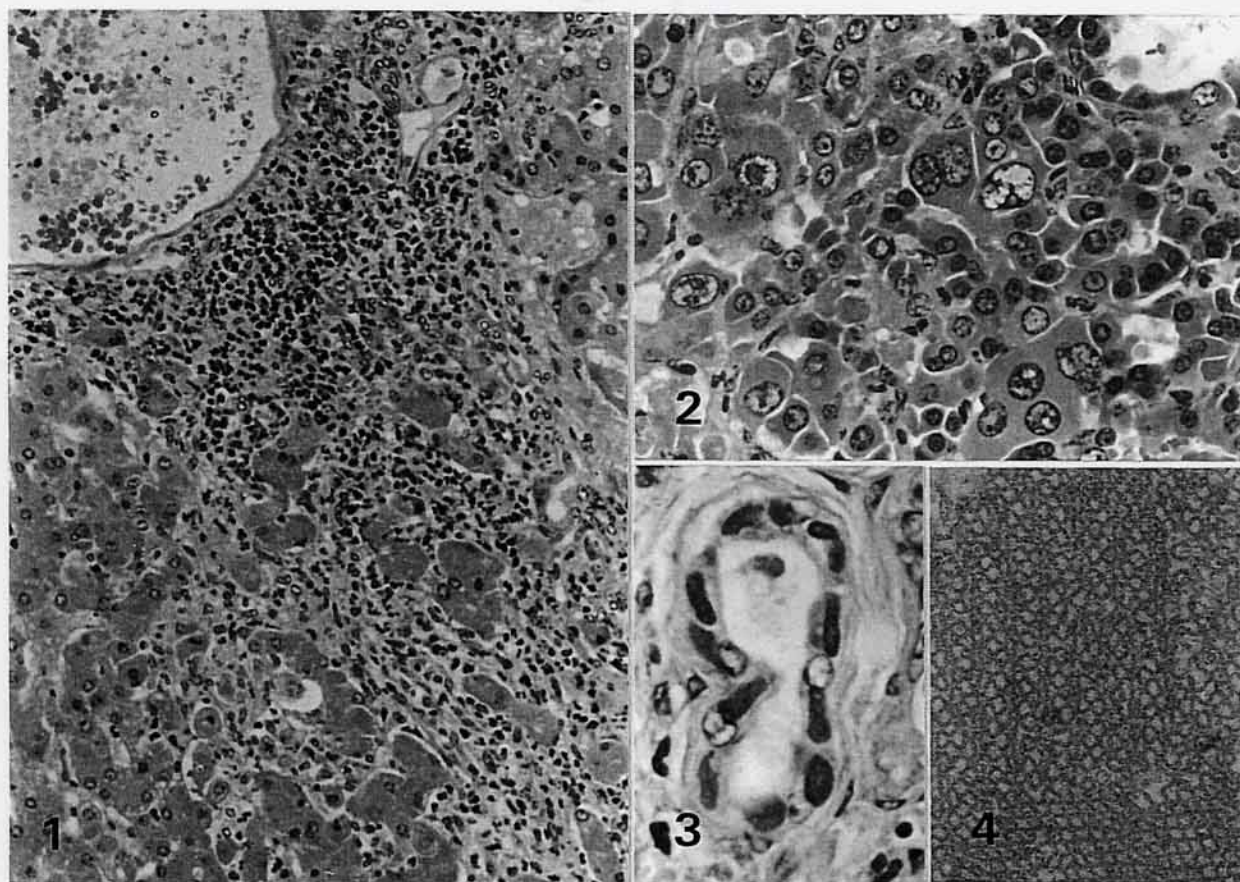


プレーリードッグの肝臓

麻布大学病理学第一講座出題 第37回獣医病理学研修会標本No.706



動物：Blacktailed prairie dog (*Cynomys ludovicianus*), 雄, 年齢2～6歳の間, 体重800g。

臨床的事項：動物園の屋外飼育場で20頭の他の個体とともに飼育されていた。元気消失, 消瘦および鼻出血により, 園内診療施設に収容されたが, その日の午後に斃死した。この動物園では1991年から飼育を開始し, 現在までに4頭が斃死したが, 肝臓疾患が確認されたのは, 本例が初めてである。

剖検所見：肝臓は全体に淡褐色で, 大小の腫瘍結節が密発し, 形が著しく不整となっていた。内側左葉中央部に最大腫瘍があり, 多発性の嚢胞も観察された。なお, その他, 胸・腹水貯留, 肺の出血と肺水腫および肝癌の肺転移が認められた。

組織所見：病変は, 次の3つに要約された。1) 慢性活動性肝炎 (図1)：限界板破壊を伴うリンパ球を主体とする門脈性肝炎, 門脈周囲および類洞内への好中球浸潤と巣状～帯状の肝細胞壊死の存在。2) 過形成性変化～腫瘍性変化：最大腫瘍は中分化型肝細胞癌 (図2) で, 他に胆管細胞癌, 淡明細胞型肝癌が

観察され, 淡明細胞型肝癌が肺に転移していた。3) 封入体形成：結節性過形成巣の肝細胞や胆管化した肝細胞の細胞質内にOrcein染色で赤桃色 (図3), Luxol fast blue染色で青色, Victoria blueおよびResorcin fuchsin染色陰性の封入体形成が認められた。特異な形状を示し, 電顕的には鎖かたびら様の編み目構造が目立った (図4)。なお, woodchuck肝炎ウイルス (WHV) の表面抗原および核抗原に対する抗体を用いて免疫染色を行ったが, 陽性となったものはなかった。

まとめ：以上のことから, 本例をprairie dogに見られた慢性活動性肝炎と肝癌と診断した。このように肝硬変を伴わず, 肝炎と肝癌が同時に見られる疾患として, hepadna virusに属するWHVによる肝炎・肝癌がよく知られているが, 免疫組織化学的および超微形態学的所見は明らかにこれらと異なっていた。また, 封入体は, その染色性と電顕像からある種の蛋白と考えられたが, この種の封入体の報告は見当たらず, 形成のメカニズムは不明であった。